

しまねの社会教育だより

島根県立西部社会教育研修センター
島根県立東部社会教育研修センター
vol. 43



photo 江津市 学校の枠を超えて繋がる川平町の花田植え
郷田小、渡津小、はなまる日本語学校の児童・生徒たちと
地域がチカラを合わせ、花田植えの伝統をつなぐ初のイベ
ントを実現しました。

特別企画
巻頭4頁！

特集

社会的包摂の実現に向けた しまねの社会教育の取り組み

2026.
9月発行

contents

- 学びがチカラに!!〔大田市大森まちづくりセンター 三浦 すみれさん〕
- わがまちの社会教育の実践紹介〔飯南町・知夫村〕
- 研修紹介レポート「受講生同窓会～研修受講生アップデート研修～」

4ページで
伝える！

特集

社会的包摂の実現に向けた しまねの社会教育の取り組み

事例1

特別支援

地域が育む「挑戦する力」～Chance Challenge Change～

お話：3C『夢』クラブ アドバイザー 土江 博昭さん（雲南市）

（聞き手：東部社会教育研修センター 社会教育主事）

【3C『夢』クラブが、特別支援学級の子どもたちの支援に力を入れるようになったきっかけは何ですか。】

きっかけは教育長時代、特別支援学級の運動会で、子どもたちの他校生との交流や体験活動の機会が極めて限られている現状を目の当たりにしたことでした。さらに、放課後子ども教室への彼らの参加がほとんどないという10年来の課題もありました。教育長退任後、「この現状を何とかしたい」、「既存の社会教育活動から取り残されている子どもたちがいる、一人も取り残してはいけない」という強い思いから、令和元年度から、「キラキラ雲南」の放課後子ども教室「わくわく教室」の一環として活動をしています。



【どんな取り組みですか。】

活動は月に1回、日曜日に実施しています。令和5年度までは、9種類のプログラムを提供していましたが、現在は、料理(和食・洋食)、水泳、ものづくり、手芸の4種類のプログラムを提供しています。私たちは、多様なプログラムを提供することで、子どもたちが自身の興味や才能を発見し、自信を育む場を提供することを目指しました。地元企業からの寄付や、島根県立大学、大東高校からの学生アシスタントの協力が、活動を大きく支えています。学生たちは、子どもたちとの関わりを通して、自身の学びを深めているようです。

【参加者や周りの変化はありましたか。】

参加者は年々増加傾向にあり、延べ参加者数は雲南市内の特別支援学級児童生徒の約3割です。参加する児童生徒の中には「一人で参加してみたら意外と大丈夫だった」という小さな成功体験が、「次も出てみよう」「他のこともやってみよう」という前向きな力に繋がった子もいます。例えば、3Cでの経験をきっかけに、スペシャルオリンピックスなどのスポーツ活動へ挑戦する子もいます。継続して参加している子は、家で料理をするなど、日常生活での主体的な行動にもつながっています。また、保護者の方々からも「集中力が続かない時があるが、3Cでは45分のメニューに集中していた」「子どもが次の3Cを心待ちにしている」といった喜びの声を多数いただいています。



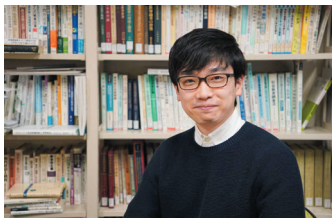
【保護者からの声で、特に印象的なエピソードはありますか。】

体が不自由でずっと水泳をしていた子が、「料理がしたい」と希望したことがありました。お母さんは無理だろうと思われていたのですが、調理プログラムへの参加を促し、その子は中学校の3年間、調理プログラムに取り組みました。最後にお母さんが「やらせて良かった」と感謝してくださいました。このエピソードは、3C『夢』クラブが目指す「挑戦する力を育む」という目的を象徴していると感じています。



【これからの展望を聞かせてください。】

目指しているのは、より多くの子どもたちが参加できるよう、まずは参加率を通常学級の社会教育活動と同水準の「市内の特別支援在籍児の半数近く」まで高めることです。そのためにもこの場を雲南市全体へ広げていきたいと考えています。支援を必要としている子が、身近な地域でも様々な体験活動ができる形にしていけたらいいと思っています。そしてそれは、3Cだけでできることでもありません。地域の大人、学校の先生、交流センターの皆さんなど、いろんな立場の人が少しずつ力を持ち寄って、はじめてこうした場は地域のあちこちに生まれていくのだと思います。



島根大学大学院 教育学研究科 講師
おのの きよひろ
大野 公寛

今号の特集テーマとなっている社会的包摂は、「社会的に排除されている人々を社会で包み、支え合うこと」（出典：日本社会関係学会ホームページ）という意味を持っています。全ての人が排除されない、誰もが取り残されない社会は、多くの人が共感する社会の理念だと思います。

ここで紹介されている4つの事例は、人々の属性も地域も異なりますが、いずれも社会的包摂につながるしまねの社会教育の実践です。教育、防災、医療、地域づくりなど様々な観点から「包み、支え合う」事例として共通しています。

事例2 防災

楽しく学ぶ防災が主体性を生む ～石見まちづくりセンターの挑戦～

お話：石見まちづくりセンター長 河上 晴夫さん（浜田市）

（聞き手：西部社会教育研修センター 社会教育主事）

【この事業を始めようと思ったきっかけは何ですか。】

私はもともと消防職員で、昭和58年・63年の豪雨や東日本大震災の現場を経験してきました。災害の恐ろしさを知る者として、それを伝える責任があると感じていたんです。いくら大きな災害であっても月日が経つと、危機感はどうしても薄れてきますから。石見地区には自主防災会が20余りありますが、一つひとつは規模も小さく、単独で訓練を組むのはなかなか大変です。「それなら、地区全体で集まれば、何か大きなことができるんじゃないか」。そう思って、石見まちづくりセンター運営推進委員会の有志と「石見地区の防災力パワーアップ事業」を立ち上げました。



【大切にしていることは何ですか。】

「みんなで作り上げる訓練」にしたいと思っています。最初に「訓練をしたい」という声が出たので、それなら皆さんで、と始めました。ただ、防災の訓練には二つの顔があると思います。役割をきちんと決めて、いざというときに動けるように備える本格的な訓練。それと、これまで防災に縁のなかった人にも、まず来てもらえる、楽しく学べる場。役員の皆さんは前者を、きっちり大切にしておられます。私はどうしても後者に寄ってしまう。どちらも必要です。その両方を一つの場でやろうとするから、毎回ぶつかりもするし、悩みもする。でも、一つの場でやるのが大事だと思っています。

【参加する人に変化はありますか。】

令和3年8月に8家族32名で開いた「防災デイキャンプ」から始まり、避難所の設営・運営訓練へと広がってきました。去年は150名規模になりました。うれしいのは、はじめは教わる側だった住民が、今では体験ブースで自分から説明役を買って出てくれること。防災という共通のテーマが、人を「参加者」から「担い手」に変えていくのを感じます。



【「防災デイキャンプ」などの取組の様子について、詳しく教えてください。】

役員側でパーテーションやベッドを組んでいると、避難してきた人が一緒になって手を動かしてくれる。炊き出しも、誰からともなく始まる。避難者と役員が一緒にストーブを囲んで話し込む。狙ってできることではなくて、予想を超えて良い方向というか、面白い方向に行ったかなと思います。



【これからの展望を聞かせてください。】

正直に言えば、今は企画から調整まで、多くをセンターが担っています。これを少しずつ、住民が主体となって訓練を企画し、私たちは支えに回る形へ移していきたい。災害は一度の訓練では備えきれませんから、急がず積み重ねて、自助を土台にした顔の見える共助の関係を育てたい。「行政と地域の間という立ち位置を活かし、失敗を恐れずに挑戦できること」。それが、まちづくりセンターが防災に取り組む意味だと思っています。

【この事業を始めたきっかけは何ですか。】

「ふえすたあみーごいわの」が生まれた背景には、伊波野コミュニティセンターが乗り越えてきた課題がありました。伊波野地区では、特に外国人住民が暮らすアパートでのゴミの出し方などを巡り、地域住民との間で生活習慣や文化の違いから来る小さな行き違いが重なった時期がありました。当時は、何か問題が起きると、すぐに外国人住民のせいにしてしまう空気すらありました。

この状況を解決するためにまずゴミ問題の現場へ赴き、自治協会と共に清掃活動を実施しました。その際にアパートの住民の方にも声を掛けました。最初は参加者が少なかったものの、夜勤明けで帰ってくる住民の方に声を掛けると参加してくれました。このような地道な活動を通じて、日本人住民と外国人住民の間には、これまでなかった相互理解と信頼が芽生え始めました。そして、この経験が多様な人々が共に地域を築くための場として「祭り」を創り出すというアイデアへと繋がったのです。



【「ふえすたあみーごいわの」について詳しく教えてください。】

外国人との共生をテーマにした事業を行って10年以上になりますが、特に令和3～4年度に出雲市同和教育推進事業の指定地区となり、地域の特性として多文化共生に重点を置いて活動したことが大きな要因となっています。加えて、「伊波野地区には夏祭りがない」という住民の声から始まったのが「ふえすたあみーごいわの」です。今年で6回目になります。単なるお祭りではなく、多文化共生を強く意識したイベントとして開催しています。ステージでは各国の伝統舞踊や歌が披露され、文化の多様性を肌で感じることができます。毎年、来場者数は驚くほど増え、今では1200人にもなりました。参加者の国籍も多様で、日本籍と外国籍の割合がほぼ半々です。昨年からは花火の打ち上げも始まり、より多くの方に楽しんでいただいています。地域住民から寄付された浴衣を着付けして、そのままプレゼントする『外国の方限定の浴衣体験』も、とても喜ばれています。

【中高生のボランティア参加も盛んだそうですね。】

自ら進んで参加してくれる若者が増えています。日本語と外国語の両方を操り、ブースの担当として活躍してくれるバイリンガルの生徒さんもいます。彼らはまさに多文化共生の象徴です。

【地域全体の変化も感じられますか。】

かつては「保守的」と評される地域でしたが、外国人住民への偏見が薄れ、誰もがフラットな立場で交流できる環境が整い始めています。多文化共生の取り組みは、外国人住民だけでなく、日本人住民の意識をも変化させ、地域全体をより開放的で温かい場所に変えてきていると実感しています。

【これからの展望を聞かせてください。】

伊波野コミュニティセンターは、「多様な文化を持つ人々が共に支え合い、地域を豊かにする」という確かなビジョンがあります。これからも、地域住民と一体となって、交流を深め、互いの文化を尊重し合うことで、誰もが安心して暮らせる、魅力あふれるコミュニティとして発展していきたいと考えています。



大野先生に
聞く！

【学び】が包摂の範囲を広げていく～4つの事例から見てくるもの～

4つの事例に共通するのは、「学び」です。ひとつは、人々の認識の枠組みが揺さぶられ、更新されるという「学び」。例えば、3C『夢』クラブの活動は、特別支援学級・学校の子どもの交流や体験の機会が少ないという土江さんの気づきから始まっています。保護者の側も、活動を通して子どもの新たな一面に出会い、子どもへの見方を新たにしています。また、梶浦さんや河

上さんの実践では、医療や防災といった専門性の枠組みが問い直されています。専門家や行政が包摂の理念を住民に押しつけるのではなく、住民が「やりたい」と思える環境や関係性を整える実践のあり方は、結果的に、「防災に縁のなかった人」「健康教室に来なかった人」など、これまで参加しにくかった多様な人々を包摂しています。このように、人々が活動の中でつながり、そこに気づきや問い直しが生まれることで、包



【この取り組みを始めた背景には、何があったのでしょうか。】

長く「モヤモヤ」を抱えていました。健康教室を開いても、来てくださるのは、もともと健康への意識が高い方が多い。本当に届けたい人に、なかなか届かない。私たちがどれだけ丁寧に企画しても、制度や事業という枠組みには、どうしてもこぼれてしまう人がいる。そう感じていました。そんなとき、人と人とのつながりや社会参加こそが健康を支えるということを知り、自分でも社会教育士の資格を取りました。学んだことを試す場が、青原公民館でした。

【具体的には、どんなことから始めたのですか。】

「住民さんが話し合う場をつくりたいんです」と公民館館長さんに伝えたら、「それやってみよう」と。「健康づくり広場」という名前で、30人ぐらいで「2040年の青原がこんな地域だったらいいな」と語り合う。私たち専門職は裏方に回り、司会も書記も置かず。そうすると、住民の「やりたい」が次々に出てきました。本格的なコーヒーを出すカフェや、子どもたちが店員をする「青原っこ商店」も生まれました。「健康づくり広場」が、住民にとって「何かを生むプラットフォーム」のようになってきたと思います。

【「青原 心の風景（こころ旅）」という活動もあるそうですね。】

住民から「思い出の場所」をつづった手紙を募って、その場所をみんなで歩きます。「殿様が通った峠道」の手紙をきっかけに山道を歩き、茶店跡で豚汁を囲みました。健康という枠を当てはめるのではなく、一人ひとりの思いから始める。それが大事だと思っています。



【参加する人たちに、変化はありますか。】

歩くのに見守りが必要な障がいのある方など、これまで健康教室に来なかった人たちが自然に加わってくれるようになりました。「自分たちも、ここに来ていいんだ」と思える場になってきた。参加者どうしの捉え方も、変わってきました。ある参加者が、「これまでは、自分たちの地域は、企画を用意してもらって、それを受け取る側なんだと、どこかで思い込んでいた。でも健康づくり広場をやってみて、同じ地域のあの人が、こんなに自分から動いて語る人だったのか、と気づいた」とふり返ってくれました。受け身だと思っていた地域の中に、隣の人の、自分から動く力を見つけていく。そうやって住民の方どうしが新しくつながっていくのはうれしい変化だと思います。

【これからの展望を聞かせてください。】

一番意識したいことは、私たち専門職が前に出すぎないことです。結果を急いで、私たちの方で答えを出してしまうと、住民の主体性をかえって奪ってしまう。だから、「やりたい」が立ち上がるのをじっと待つ。そして、この営みを誰か一人の熱意に頼るのではなく、社会教育の視点を持った「仕組み」として根づかせたい。制度からこぼれ落ちる人も包み込める地域にできるか。その問いを、これからも持ち続けます。



摂の範囲が広がっていくのだと思います。

もうひとつは、新しい地域社会のかたちが発明されていくという「学び」です。伊波野地区の夏祭りでは、「浴衣体験」や「ステージ」など、多文化共生による祭りの新しい楽しみ方が発明されているようです。これは社会的包摂を考える際にも重要です。包摂は、不安や戸惑いを感じている人々を既存の社会に統合することではなく、そのような人々とのつながりの中で新しい社会のあり方を模索していくことを含意しています。

そして、このような4つの実践の基盤にあるのが、

社会教育施設や社会教育人材です。2つの役割がみえてきました。ひとつは、社会教育施設・人材が、地域社会に開かれているということ。日常的に地域の多様な人々や組織とつながっているからこそ、包摂的な活動が展開できるのだと思われます。もうひとつは、そうした関係性を土壌としつつ、発せられた様々な聞こえにくい声を、事業や活動という形にしていることです。「しょうがない」というあきらめや「誰かのせい」にする分断や排除としてではなく、つながり楽しむ「学び」として再構成する、そこに社会教育施設・人材の役割があります。

学びがチカラに!!

社会教育研修センターの研修で学んだことを、地域や現場での実践に活かしていच्छる方を紹介します

「やってみたい！」をカタチにする大森サラダボウル！

大森まちづくりセンター 職員
三浦 すみれさん



大田市の大森まちづくりセンターに職員として勤務する三浦さん。令和7年度に「ファシリテーター養成講座」を受講されました。講座での学びを日々の現場でどのように活かしていच्छるのでしょうか。今回は、三浦さんが地域住民とともに展開されている「大森サラダボウル～異業種交流～」の実践を中心にお話を伺いました。

■「私も『やってみたい！』を支えたい！」その想いが学びのスタート！

「大森サラダボウル」に携わる中で、ファシリテーターの方が参加者の願いや想いを引き出す姿に感銘を受けました。「私も、参加者の『やってみたい！』を引き出し、活動へとつなげるサポートがしたい！」という思いが強くなり、講座の受講を決めました。講座では、「楽しい場づくり」「気持ちに寄り添う関わり」「願いや想いを引き出す工夫」など、環境づくりや参加者に関わる姿勢について学びました。

■色紙と行灯がつなぐ、新たな「つながり」と「動き」



グループで「DEDO」ゲーム

「大森サラダボウル」は、職業や年齢、経験の異なる住民が交流し、新たなつながりや学びを生み出すことを目的とした交流の場です。運営仲間の住民4人がそれぞれの知り合いや興味のある人を誘うという仕組みで、多様な人が集まる工夫をしています。今回は、交流と自分たちの町の資源に愛着をもつことを目的に開催しました。名刺交換を行ったり、「質問カード」を用意したりして、初対面でも会話が弾み、距離が縮まる工夫をしました。その後、地域を知ることが目的に、地域の方の特技や趣味などの情報が記載されたカードを使用する地域密着型のUNO風カードゲーム「DEDO」を使って神経衰弱をしました。

次に、願いや想いを色で具現化し、表現・共有する3Dカラーラベルワークを用いて、「あなたが住む・働く・関わるまちにどんな願いを込めますか？」という問いについて考えました。以前の会で話し合った大森の町への願いや想いが込められた色紙を自由に組み合わせて貼り付け、多種多様で美しい行灯が完成しました。作成後、行灯を見せ合いながら、込めた願いや想いを伝え合う楽しそうな姿が印象的でした。ものづくりに関わる人が多い地域なので、カタチにして表現するこの手法も効果的だったのかなと思います。

行灯は「お祝いマルシェ」に展示し、多くの方に大森の町について考えていただくきっかけになればと考えています。映画上映会の企画など、この場をきっかけに「やってみたい！」をカタチにする動きも進行中です。



色に願いと想いを込めて行灯作成

■誰も取りこぼさない「優しい場」をつくり続けたい！

この実践で工夫したことは3つあります。1つ目は、願いや想いをカタチにする手法を取り入れたことです。色紙を貼ることで、楽しく、安心して気持ちを表現することにつながりました。2つ目は、参加者の気持ちに寄り添う関わりです。1色でも10色でも、重ね合わせても自由。自分の気持ちを素直に表現し、作成していただくことを大切にしました。3つ目は「DEDO」を活用したことです。この町だからこそ楽しめるゲームが、話しやすい雰囲気をつくり、地域の人への理解を深める時間にもなりました。

これらの工夫が、楽しみながら、素直な願いや想いを引き出し、新たな動きへとつながったのではないかと思います。今後も、大森の町に住む全ての人を取りこぼすことなく、関わり、交流する「優しい場」をつくり続けていきたいと思っています。



一人ひとりの願いや想いが込められた行灯

マルシェへの展示や映画上映会といった具体的なアクションへと広がりを見せる「大森サラダボウル～異業種交流～」。講座での学びを実践に生かし、人々の「やってみたい！」を次々とカタチにしている三浦さんのファシリテーションは、これからも大森の町に、新しい学びと挑戦の風を吹き込み続けることでしょう！



本気で楽しむ大人たちから、子どもたちへ

頓原公民館 主事 菅 夏希

頓原探険隊ふえふ実行委員会は、頓原公民館子どもの体験活動「頓原探険隊」に参加していた若者たちと、「頓原を盛り上げたい」という思いを持つ地域住民が集まって活動している団体です。

私たちは、音楽イベントや運動会、お化け屋敷など、地域のみんが楽しめる活動を企画しています。その中で大切にしているのが、「まずはスタッフが本気で楽しむこと」です。大人が夢中になって挑戦する姿を見て、子どもたちにも「地域で面白いことができる」「自分もやってみたい」と感じてもらえたらと考えています。



悲鳴を想像しながら作戦会議



世代を越えた仲間たち

お化け屋敷「ふえふの館」は今年で4年目を迎えました。地域の廃材なども活用しながら、スタッフが力を合わせて作り上げています。回を重ねるごとに仲間も増え、中高生や大学生も運営に参加しています。

大人たちの「本気の遊び心」が、子どもたちの「挑戦する気持ち」を育み、新たな地域のつながりを生み出しています。

大人たちの「本気の遊び心」が、地域の新たなつながりと学びを生み出しているという点を高く評価します。楽しみながら活動を創り上げる大人の姿は、子どもたちにとって身近なロールモデルとなり、挑戦する意欲や地域への愛着を育みます。大人が楽しむ地域には、子どもたちの笑顔と挑戦が生まれます。まさに飯南町の社会教育の力を感じる取組です。

(飯南町教育委員会
派遣社会教育主事)



社会教育の実践紹介

◆本記事は、ご寄稿いただいたものです◆



『おっちら (ゆっくりのんびり)』できる 大人と子どもの居場所づくりを目指して

大人と子どもの居場所づくり「おちらと」 代表 吾郷 真季子

私たちが住む知夫村は、人口550人ほどの自然豊かな離島です。施設も最低限で、室内で自由に遊べる場所や児童館はありません。海が近く、子どもだけでの外遊びが心配なところもあります。自分の子どもが小学生になり、気兼ねなく子どもも大人も集まれる居場所が欲しいと思い「おちらと」を立ち上げました。当初の案は、①月1回の日曜日の居場所と②子ども食堂の2つでした。島の中学生は卒業と同時に島の外の学校へ行くことが多いです。そのため②の子ども食堂で、料理に親しむことが大切だと感じたので取り入れることにしました。

活動してわかったことは、居場所を利用するのは一人っ子が多いということです。私の娘も一人っ子です。子育てのサポートが少ない環境の人たちや移住されてきたご家族にとって、月2回集まれる場所は貴重です。親同士のコミュニケーションの場になっています。現在の活動は、①②に加え、月2日の放課後見守りと週2日の長期休暇子ども見守りです。どちらもスタッフの人員確保が課題です。

これからも、みんなが安心して過ごせる居場所にしていきたいと考えています。



子ども食堂



放課後の居場所を利用する様子

地域の課題と向き合い、子ども食堂や居場所づくりの取組を続ける「おちらと」さんの活動は、人と人をつなぎ、多世代が参画できる仕組みを構築していると感じます。知夫村には、このように自発的に発足した団体がほかにも存在します。「自分たちの村を自分たちでよくしていく」という当事者意識を持った団体が紡ぐ素晴らしい活動を、今後も継続して支援していきたいと考えています。

(知夫村教育委員会 派遣社会教育主事)

みんなで再会！

研修受講生 アップデート研修 受講生同窓会

つながりを、力に

最近こんなことして…

私も…



研修で出会った仲間と、その後もつながり続けられたらー。
そんな思いから昨年度新たにスタートした受講生同窓会。

当センター主催研修の修了生を対象に、昨年度は公民館等職員、行政職員、コーディネーター、NPO、家庭教育関係者など、多様な方々にご参加いただきました。当日は、それぞれの現場で実践を続ける中で、悩みや工夫を持ち寄り、語り合い“ゆるやかにつながる時間”となりました。今回は、その様子を紹介します。

研修の流れ

1 久しぶりの再会・自己紹介



久しぶりの再会に笑顔があふれ、始まる前から自然とあたたかい雰囲気に。自己紹介では、「あのとき…」と研修の思い出話に花が咲きます。これぞ同窓会。

2 実践を持ち寄って対話



実践していること、やってみたいこと、悩みについて、話し合いました。「どういうこと?」「私も…」と質問しながら、情報交換していきます。

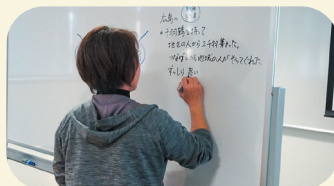
3 テーマトーク



参加者の関心や課題をもとにテーマを設定し、自由に語り合いました。対話を通して、新たな視点やつながりが生まれました。

修了生のここがすごい！

出された意見を
ホワイトボードに
書き出し、
議論を見える化！



互いの意見を
引き出し、
整理しながら、
円滑に進行！



参加者の声

新たな発見、しかけのヒント
を得ることができた。

また集まって、もっと
話したいと思った。

同じ悩みをもつ人と
話ができ安心した。



研修を終えて

この同窓会では、今の実践や悩みを語り合う中で、新たなヒントやつながりが生まれていました。

当センターの研修は、“学びの場”であると同時に、“出会いの場”でもあります。立場や地域を越えて、語り合える人との出会いが、あなたを待っています。

次は、あなたもこの輪の中へ。

あなたの実践を、ぜひ聞かせてください。

今年も開催決定！



令和9年

1月15日(金)



【東部会場】**サン・レイク**
(出雲市小境町1991-2)

【西部会場】**いわみーる**
(浜田市野原町1826-1)

【内容】 実践共有・情報交換など

【対象】 以下の研修講座の修了生
・公民館等職員実践研修
・ファシリテーター養成講座
・社会教育主事講習【B】

東部社会教育研修センター

〒691-0074 出雲市小境町1991-2 サン・レイク2F
TEL.(0853)67-9060 FAX.(0853)69-1380

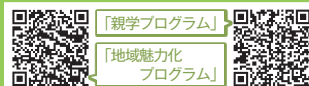
URL: https://www.pref.shimane.lg.jp/tobu_shakaikyoiku/
E-mail: tobu_shakaikyoiku@pref.shimane.lg.jp

西部社会教育研修センター

〒697-0016 浜田市野原町1826-1 いわみーる3F
TEL.(0855)24-9344 FAX.(0855)24-9345

URL: https://www.pref.shimane.lg.jp/seibu_shakaikyoiku/
E-mail: seibu_shakaikyoiku@pref.shimane.lg.jp

第44号は
2月末 発行予定



※当センターホームページから閲覧・ダウンロードできます。